

コロナ禍における遠隔ダンス授業の成果と課題  
— 双方向のリアルタイム・対話形式の学び —

Achievements and challenges of distance dance lessons in COVID-19  
— Two-way real-time / interactive learning —

高橋 和子  
TAKAHASHI Kazuko

(2021年4月21日受理)

**要約**

遠隔ダンス授業を双方向のリアルタイム・対話形式で試み、学生244名が何を学んだかを明らかにする目的で、学生の記述内容を計量テキスト分析した。その結果、本授業で学生はオンラインダンスと出会い、対面を通して個性ある動きで創作し、教師や児童にとっての表現や指導に大切なことを考え、伝えることを学んだことが明らかになった。具体的には、遠隔授業でも踊ることやグループでの即興表現を楽しみ、双方向のリアルタイム・対話形式の学びは実技であっても可能であり、事前・事後学習や課題を体験・記述することで「分かる (知る)」と「できる」の往還が一層強化されたことにより、教員養成系ダンス授業としての目標が達成できたと考えられる。その為には教材準備は必須であり、指導者の「ほめる」行為が学生の自信に繋がると共に恥ずかしさや難しさを軽減させたが、遠隔授業では目の前の学生の変化に臨機応変に対応できる指導者の実践力が課題である。

**キーワード** : 遠隔ダンス授業 リアルタイム 対話形式 ほめる

- I. はじめに
- II. 方法
- III. 結果と考察
- IV. 結論

## I. はじめに

### 1. 研究の背景

大学におけるダンス実技は通常、対面で実施されている。特に教職科目においては、小学生・中学生・高校生を対象にした教材を提示し体験することや、指導法を習得するために教師役と生徒役になって模擬授業なども行っている。これまでは、リアルタイムで学生と教員の対話形式で行っていたが、COVID-19感染防止のため2020年度前期は遠隔（オンライン）で実施した大学が多く、履修を後期に移して対面で行った大学もあった。

「withコロナ時代のダンス授業」に関する教員養成系大学の調査では<sup>1)</sup>、2020年前期は74%の大学教員が遠隔で実施し、内訳は「遠隔授業のみ」43%、「一部遠隔で実施」57%であった。遠隔授業の形態は「①オンデマンド型」43%、「②同期型（同時双方向型）」32%、「①②の組合せ」25%であった。遠隔で工夫した点は次の通りであった。なお、調査項目によっては重複回答があり、本研究者がまとめ直した項目もある。

「教材選択」では、「模擬実践をダンス部で試して妥当な教材を選択」「リズムダンスは教員の自作や親子で同時に楽しめるダンス」「学校現場で取り上げられるダンス」「即興的なダンスバトル」「ダンスステップ」「曲や担当パートを指定」「交流的なレクリエーション」「身体感覚の知覚と理解」「ダンスの構成理論」「舞踊史」「指導法解説」「トレーニングにならないよう内容を配慮」「参考ダンス動画：劇場や舞踊団やYouTube配信」「1回の講義のテーマを絞る」「授業内容を細かく設定」「学習の動機付け（なぜ学ぶのか、どう発展するか）を重視した内容」等。これらの結果からは、遠隔で可能な教材選択を試行錯誤し、著作権の関係で教員自らが踊った映像やリズム系ダンスを選択したことも特徴と言える。「教材作成」では、「字幕入り映像」「パワーポイントスライドを動画に変換」「動画は10-15分と短めに作成」等。「授業方法」に関しては、「オンデマンド配信」「webサイトに教材をアップ」「パワーポイント・紙面資料・動画資料・YouTubeの併用」

「学生間と教員の相互作用（グループ創作も含む）：ブレイクアウトルーム（以下、BR）、Google Classroom、Teamsのチャンネル・クラスノートブック、学生間メールやLINE活用」「群舞作品：構成シートを作成提出」「ソロ作品：動画提出」「遠隔利用のテスト・リアクションペーパー」「予習時は課題中心に学習への動機付け、授業時はBRで共有し学生間の交流」等。

まとめると、オンデマンド型では動画配信が多いものの学生と教員の相互作用を重視しており、同期型では教員と学生の双方向の指導やグループ創作での学生同士の活動を保証する試みがなされていた。教員養成系大学では文部科学省の学習指導要領<sup>2)</sup>にも提示されている「主体的・対話的で深い学び」を踏まえ、コロナ禍の遠隔ダンス授業においても、双方向の授業実践の傾向にあったと言える。このことは戦後のダンス教育が重視してきた方法であり、その学びを保証しようとする指導者が多いことを示している。

### 2. 研究目的

遠隔授業の学習効果に関する研究の動向について久保田は<sup>3)</sup>、2020年CiNii検索ヒット件数は「遠隔授業」75件、「遠隔授業効果」2件であり、「COVID-19の影響からか論文数は急増したものの、学習効果に関連した論文や遠隔授業による学習効果への影響に関する論文は少なく、対面授業と比べた効果はわからない」と述べている。この傾向はダンス授業に関しても同様であり、遠隔実践の実態は『女子体育』<sup>4)5)</sup>などで報告され始めているものの、授業成果の研究報告は少ない。

そこで、本研究では遠隔ダンス授業においてグループ創作活動を重視して、指導者と学生間での双方向のリアルタイム・対話形式を試み、教材（内容・方法）から、学生は何を学んだかを明らかにすることを目的とする。なお、小学校では「表現運動」、中学校・高等学校では「ダンス」という名称を通常使うが、本論文では表現運動も含めて「ダンス」という語を使用する。

## II. 研究方法

### 1. 対象

#### 1.1 対象科目・授業方法

本研究（以下、指導者）が、A大学教育学部の教職必修科目「小学校教科専門科目（以下、小教専）表現運動」（90分間×4回）を対象に、遠隔で双方向のリアルタイム・対話形式で実践した。A大学では前期は実技科目も含め全て遠隔で実施しており、双方向のリアルタイム・対話形式は小教専表現運動（以下、本授業）のみであった。本授業では、文部科学省小学校学習指導要領体育<sup>2)</sup>で提示されている低学年「表現リズム遊び」と中学年・高学年「表現運動」の教材（表現系、リズム系、フォークダンス系）と指導法（教師役・児童役での模擬授業も含む）の習得を目的とした。

他の遠隔授業では「音声もビデオもオフにした受講」を原則にしたが、本授業では指導者が学生の動きを見ながら言葉かけをしたり、学生同士がBRで個別学習をしたりするため、ビデオをオンにして学習を進めた。ただし、ネット環境や顔を出すことに抵抗がある場合は、学生の自主性を重んじた。

#### 1.2 対象者

大学1年生244名（男子117名、女子127名）（60名×4クラス）を対象とした。A大学教育学部での1年次のクラスは20名単位で構成され、1名の教員が基礎ゼミを担当し、教職必修科目の小教専や初等教科教育法は、1クラス20名が3クラス合同で履修する。1年生はキャンパスにきたこともなく、同級生や教員と直接会ったこともないまま、遠隔で受講

表1 小教専「表現運動」の授業内容と課題①②③④⑤

1回目	ダンスウォームアップ：からだをほぐす教材を知る 予習 「和子の幸せ体操」「オクラホマミクサー」「新聞紙」【野村萬斎狂言の笑い】視聴 Zoom 『グーチョキパーでめちゃくちゃダンス』『新聞紙』BRで先生役・児童役 課題 ①「表現：小学校での4年間に渡る取組」視聴、学んだことを記述・提出
2回目	リズム系ダンス：サンバ・ロック・ヒップホップを踊る 予習 【#うちで踊ろう：星野源/三浦大知、横国大】【白井麻子先生リズム系指導】視聴 zoom 【サンバ：田島正浩】【八景寺マシーンパラダイス：小笠原大輔】を体験 『あんたがたどこさ』を歌いながらリズムカルに即興で踊る。BRで2人組 『オリジナル#うちで踊ろう』を即興表現。BR & MRで曲を用意し踊る 課題 ②「うちで踊ろう」を体験して学んだことを記述・提出
3回目	幼児期に身につけたい36の基本動作をもとにオリジナルパブリカ創作 予習 【パブリカ解説動画】【コンドルズの遊育計画&36の基本動作】視聴 zoom 「36のカルタでジェスチャー」「物語風に即興表現（例：投げる-打つ-走る）」 「オリジナルパブリカを36の動きを参考にグループ創作」BR&MR3人組、曲で踊る 課題 ③「オリジナルパブリカ」を体験して学んだことを記述・提出
4回目	<走る・止まる>動きからイメージを誘発させ即興表現 予習 「ダンス教材①走って止まる②忍者になる」視聴 Zoom 「低学年用：だるまさんがころんだ」BR先生役・児童役、「中学年用：忍者になる」 MR→BR（役割分担、曲ミッションインボッソブル53秒）→MR 課題 ④「ダンスの基本的内容を考える」視聴、課題⑤「遠隔授業に関して」記述・提出

註「」教材は高橋和子公式サイト（<http://kazuko-ynu.jp>）で無料視聴できる

【】教材はYouTube等にアップされている動画。他の【】は非公開の為、授業時に視聴

【野村萬斎狂言の笑い】<https://www.youtube.com/watch?v=k38qxc7K-HI>

【#うちで踊ろう：星野源/三浦大知】<https://www.youtube.com/watch?v=j3q1V3QHSU4>

【パブリカ解説動画】[https://www.youtube.com/watch?v=hjUykdo1I\\_w](https://www.youtube.com/watch?v=hjUykdo1I_w)

【コンドルズの遊育計画】<https://www.bing.com/videos/search?q>

『』は zoom で使用した教材.MRメインルームではビデオ on や off で参加

曲は学生各自がダウンロードしBRで練習

することになった。そのため、本授業が入学して初めてクラスのメンバーと画面を通して出会う機会でもあった。対象者の表現運動やダンスの経験を授業中に聞いたところ、特に男子のダンス経験は少なく、小・中・高校を通して運動会や体育祭でリズム系の振付ダンスを行った学生が多い状況であった。なお、授業支援のチューデントアシスタント（以下、SA：BさんとCさん）を各1名つけた。SAはA大学教育学部3年生で小学校教員志望のダンス部であり、類似の教材を1年時に対面で学んでいる。

### 1.3 授業内容

4回の授業内容<sup>4)</sup> (表1) や関連資料を事前に授業支援システムにアップし、事前・事後学習では関連教材の映像視聴の励行と課題①②③④⑤(100字以上の記述)を提出させ、課題⑤は自由提出とした。従前のダンス実技授業においては、ダンスの専門的知識や指導法のポイントを授業中に提示すると共に、次週の予告をして関連するイメージ学習を促しはしたが、今回のように事前・事後学習で映像視聴や知識の学習をさせたことはあまりなかった。教材選択にあたっては学生がよく見聞するダンスや、学生がダウンロードしやすい曲（うちで踊ろう・パブリカ・ミッションインポッシブル）を使用し、BRでの練習時には各自で曲を準備した。さらに、SAとは事前に教材をzoomで試行し、学生への言葉かけやBRで行う課題の留意点などを検討した。

授業当日の進行は、遠隔で教材を提示し、指導者やSAが模範的に動いた後、学生が体験する。応用編として2～4名のグループでBRに入り、自分達で動きやイメージを決め即興表現や模擬授業を行う。その後、メインルームに戻り発表を行うという流れである。

## 2. 分析方法

学生244名が記述した「学んだこと」(表1中の課題①～⑤)を分析データとし、KH Coder Ver.3<sup>6) 7)</sup>を用い計量テキスト分析を行った。分析の手順は次のとおりである。なお、「STを通して学んだこと」(自由記述)も参考資料にした。

### 2.1 前処理

KH Coderの分析において、エラーの原因になる文字は分析から除外し、延べ語数109,686語（異なり語数 3,536）が分析に用いられた。

### 2.2 共起ネットワーク

KH Coderの共起ネットワーク分析を用いることによって、抽出語の関係性を描写できる。関連語(Jaccard係数上位70語)の共起ネットワークを描写しつつながりの強い語同士のJaccard係数を算出し、その上位70までをネットワーク図に表示した。なお、互いに強く結びついている語のまとまりをサブグラフ検出(モジュラリティによる方法)機能を用い、サブグラフを描画した。

### 2.3 対応分析

KH Coderの対応分析を用いることによって、データ全体を分割してどの部分に特徴的な語が使用されているかを図示できるため、性差(男女別)について特徴的な語(Jaccard係数上位 60 語)を図示した。

### 2.4 コーディング・自己組織化マップ

上述した共起ネットワークの分析で得られたサブグラフに含まれる語を参考にして、サブグラフを意味のまとまりごとにグルーピングした。このグループに含まれる語について関連語検索、コロケーション統計機能により、関連する語や前後で用いられる語を検討し、コードを設定、これらのコードを元に自己組織化マップを作成した。

## 3. 倫理的配慮

データ収集に際しては、対象者の大学生に研究計画書を送付し、個人情報保護の立場から、研究のみに使用することを説明し同意書を得たうえで、協力できる対象者に限り実施した。本研究は「静岡産業大学倫理委員会」(承認番号20008)を通っている。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. データにおける抽出語数

対象者244名の総抽出語数と重なり語数の内訳を表2に示す。記述した総抽出語数は109,686語、課題別では①24,638語、②24,133語、③23,533語、④29,799語、⑤7,287語であっ

表2 学生が記述した総抽出語数・異なり語数・ケース数

	数/課題	①小学校	②うちで	③パブリカ	④基本	⑤遠隔	男子	女子
総抽出語数 (使用)	109,686 42,560	24,638 9,416	24,133 9,374	23,533 9,103	29,799 11,953	7,287 2,790	41,321 15,953	68,365 26,607
異なり語数 (使用)	3,536 3,007	1,527 1,223	1,615 1,313	1,575 1,268	1,689 1,361	882 659	2,331 1,930	2,848 2,394

た。④の語数が多い理由は、課題「ダンスの基本的内容を考える」の映像は多岐にわたる内容であり、全授業のまとめも含まれていたためと考えられる。この映像は本研究者が学習指導要領の表現運動やダンス（表現系・リズム系・フォークダンス系）の位置づけや特徴、発達に応じた指導法のポイント等を10分間にまとめて解説している。⑤「遠隔授業に関して」は自由提出のため全総抽出語数は少ないが、①～④に比べ「全総抽出語数」中の「異なり語数」の割合が高く多様な広がりが見られた。男女別の傾向では、受講者数はほぼ同数であるにもかかわらず、「全総抽出語数」では女子は男子の1.7倍、「異なり語数」では女子は男子の1.2倍であり多様性も見られた。

## 2. 授業課題別の特徴的な抽出語

### 2.1 4回の遠隔授業で学生が学んだこと

学生が本授業で何を学んだかを知るために、授業課題別の特徴的な抽出語を共起ネットワークで作成し、その傾向をみた。

1回目の課題は（図1-1）、「小学校の4年間にわたる表現運動実践」動画を見て「あのような実践ができる秘訣」を記述させた。動画は表現運動に初挑戦した男性指導者の5分間のダイジェスト版である。彼は表現を広げる学外活動も実践しており、それに関連する「海」「美術館」「実際」「行く」という語の固まり（群）以外の5群は全部関連していた。「児童」「動画」や「子供」が「楽しむ」「実践」を「見る」「秘訣」「考える」ことは、「体」「動かす」「表現」「授業」「行う」という語群に繋がり、将来教員になる「自分」に重ね合わせたと推測できる。

2回目の課題は（図1-2）、星野源の作曲した「うちで踊ろう」の曲を使用して、リズム系ダンスで学んだことを記述させた。「違う」「面白い」「手」「足」という2群以外の5群は全

部関連していた。「授業」「曲」「動き」「踊る」「思う」ことや、「即興」は「難しい」と「感じ」ながらも、「クラス」の「人」を「見る」ことや、「歌詞」に「合わせる」ことを「考え」、「自分」の「体」を「動かし」「ダンス」「表現」することは「楽しい」語と繋がりをもっていた。

3回目は（図1-3）、「パブリカの即興表現」で学んだことを記述させた。小さな5群以外は大きな群を形成していた。一つ目は「パブリカ」を構成する「基本」「動作」を使って「表現」「踊る」語の固まり。二つ目は「自分」「歌詞」に合わせ「動き」「考える」のは「難しい」という固まり。その中心に「ダンス」「楽しい」「思う」語が配置されていた。学生は「パブリカ」ダンスは「幼児期に身につけたい36の動きの20種類以上で構成されている」ことを事前学習し、それらの知識と自身の体験が統合されて「理論と知識の往還」がなされたと考えられる。

4回目は（図1-4）、「ダンスの基本的内容を考える」を視聴して学んだことを記述させた。共起ネットワークでは、小さな5群以外は大きな5群が繋がりを形成していた。その中の一番大きな固まりは、「教師」が「ダンス」「表現」「授業」を「子供」「児童」に「指導」する上で「自由」が「大切」であり、教師の「表情」「声」「トーン」が「重要」であること。また、「ダンス」には「創作」の「動き」や「リズム」に「乗る」「合わせる」ことや、「フォークダンス」があること。並びに「学年」に応じて「グループ」「学習」の「指導」が「必要」の語と関連がみられた。ここでも、学生自身の4回の授業体験と事後学習において「理論と知識の往還」がなされたと考えられる。

### 2.2 授業毎の頻出語と強く結びつく語

これまでみてきた4回の授業の特徴語ベスト5を「頻出回数」「多くの語と強い結びつき」

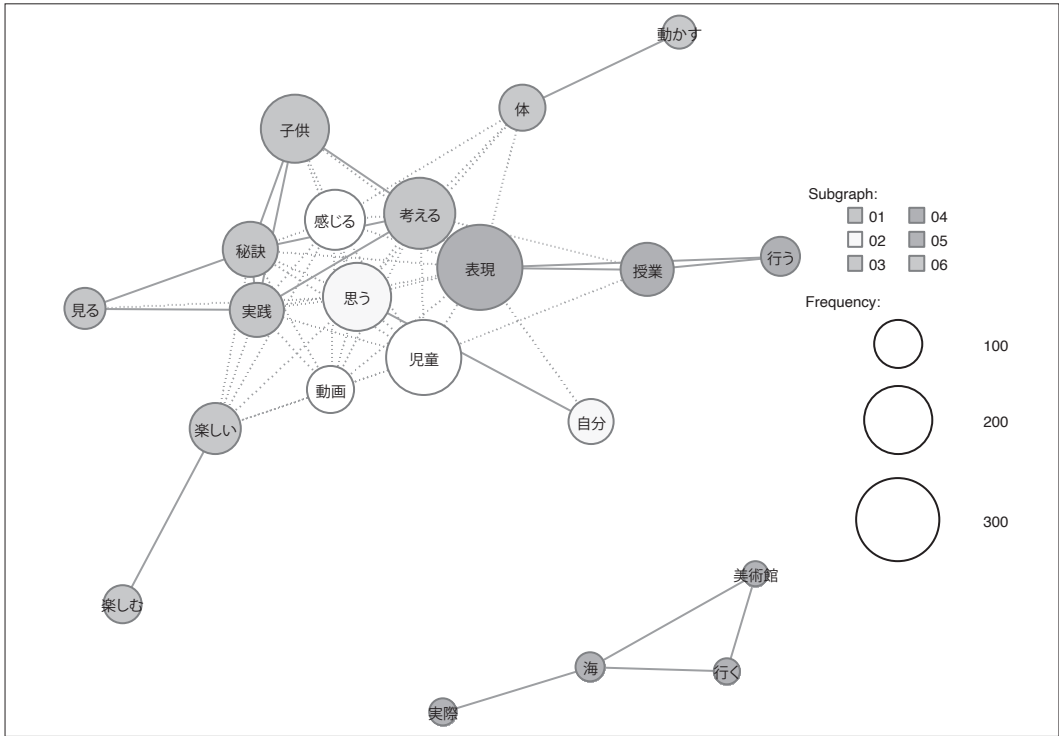


図1-1 抽出語の共起ネットワーク：授業1回目「小学校の実践映像視聴」

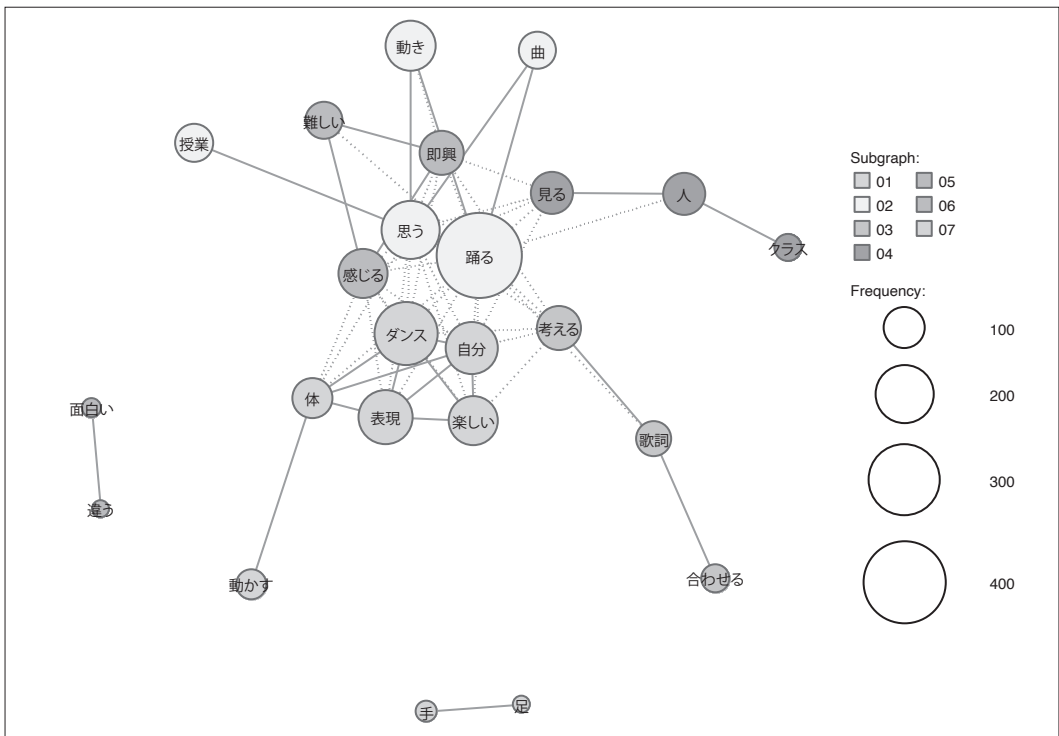


図1-2 抽出語の共起ネットワーク：授業2回目「うちで踊ろう」

コロナ禍における遠隔ダンス授業の成果と課題

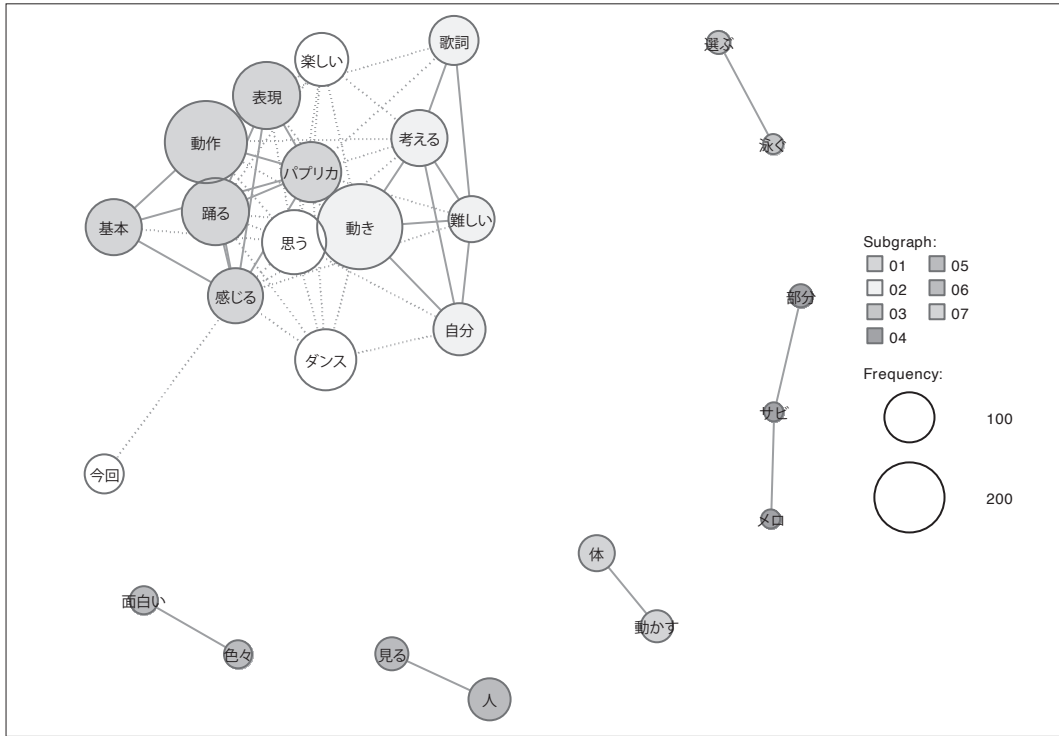


図1-3 抽出語の共起ネットワーク：授業3回目「パプリカの即興表現」

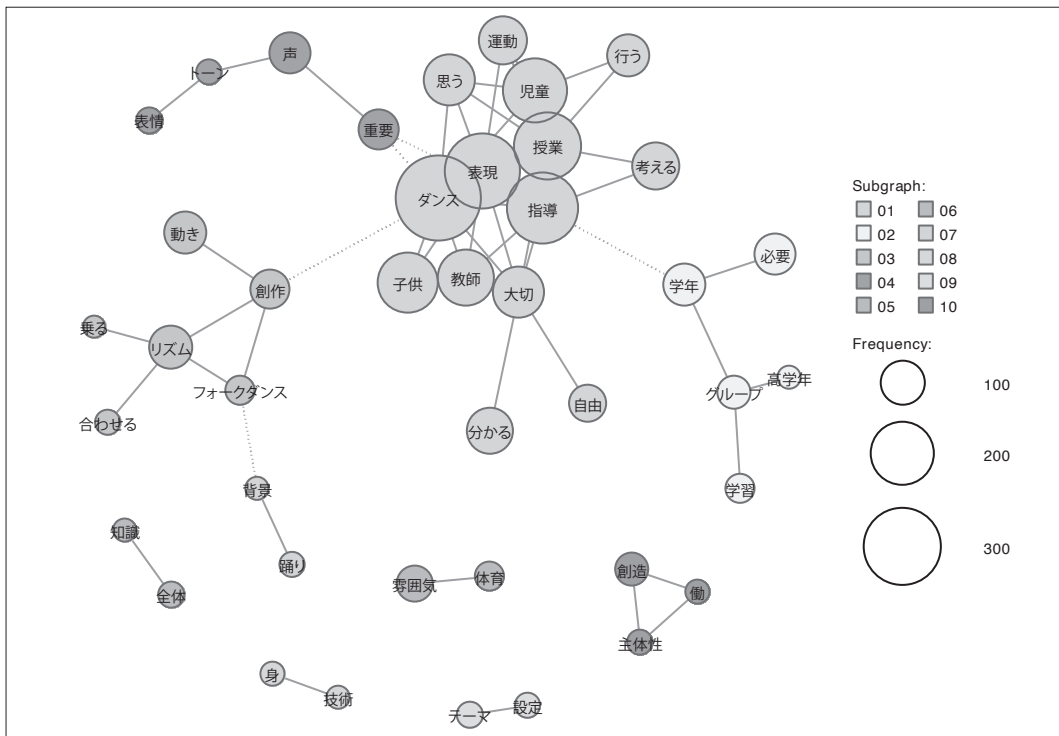


図1-4 抽出語の共起ネットワーク：授業4回目「ダンスの基本的内容を考える」

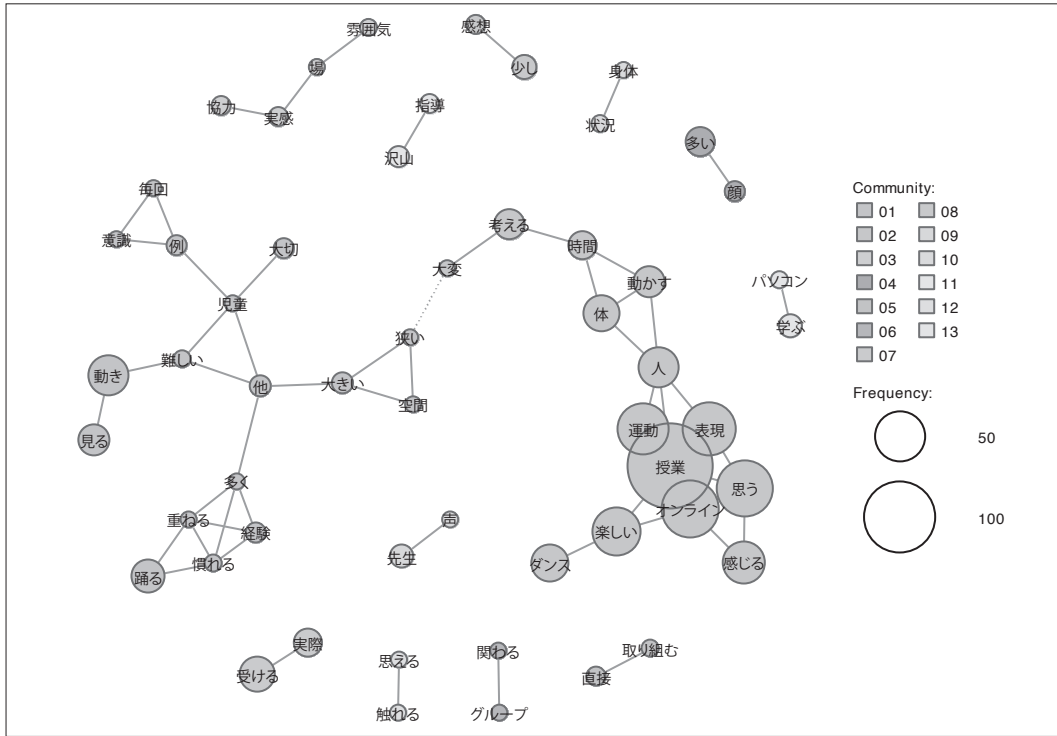


図1-5 抽出語の共起ネットワーク「online（遠隔）授業に関して」

から挙げる。1回目は小学生の表現運動の動画視聴であることから「児童」「表現」「考える」が、2回目と3回目は学生自身のダンス体験であることから「自分」「踊る」「楽しい」が、4回目はダンス指導動画であることから「児童」「教師」「大切」があげられていた。以上のことから、4回の遠隔授業を通して、表現やダンスを自分の体験や教師の指導の立場から、捉えていたことが明らかになった。

- ・ 1回目「児童」「表現」「授業」「実践」「考える」
- ・ 2回目「自分」「踊る」「即興」「ダンス」「楽しい」
- ・ 3回目「自分」「動き」「踊る」「考える」「楽しい」
- ・ 4回目「児童」「ダンス」「指導」「教師」「大切」

### 2.3 遠隔授業に関する特徴的な抽出語

「遠隔授業に関して」の記述では（図1-5）、小さな11群と大きな2群を形成していた。1群は「オンライン」「授業」において、「人」「体」「動かす」「考える」「時間」は「大変」な一方、「ダンス」「表現運動」「楽しい」と「感じ」「思う」語。2群は自身の家の「狭い」「空間」で「大きく」「踊る」ことに「多く」「慣れる」「経

験」「重なる」ことと、「児童」「動き」「見る」「難しい」が表現運動は「大切」なため指導者は「毎回」「例」を「意識」する語と関連していた。ここでも、学生自身は遠隔での表現運動を楽しい体験として、児童にとっても大切なものとして、捉えていたことが明らかになった。

### 3. 男女別による特徴的な抽出語

男女における「全総抽出語数」「異なり語数」、並びに、小・中・高校期におけるダンス経験に差がみられたため、男女別に抽出語の対応分析を行い、その傾向をみた。図2は男女別の特徴的な抽出語の分布を示している。図中の原点(0.0)付近ではどの項目でも共通に用いられた語が配置されている一方で、原点からの距離が遠く「男」「女」の項目の表示位置と同じ方向に位置する語は、各々の項目で特徴的に多く抽出された語を示している。

その結果、男子は「今回」「学ぶ」「子供」「活動」「秘訣」が特徴的であり、自身の体験に



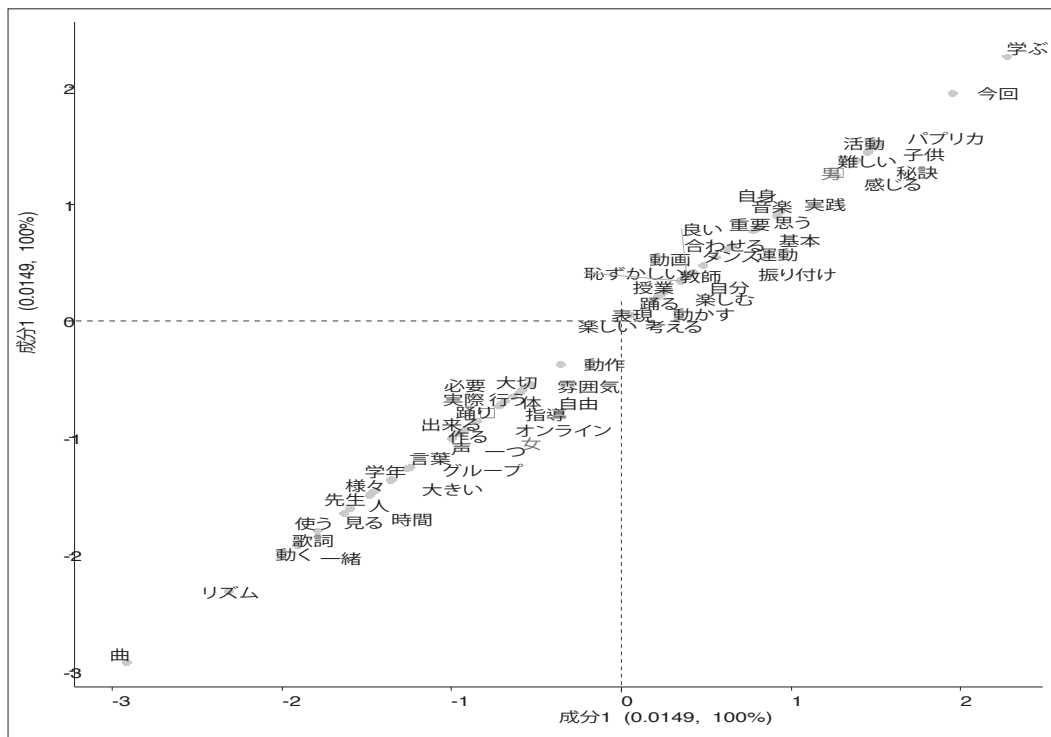


図2 表現運動抽出語対応分析：男女別

においては「難しさ」「感じる」ものの、教員の視点から「子供」「学ぶ」が表現されていた。女子は「曲」「リズム」「歌詞」「動く」「一緒に」「人」「グループ」「作る」が特徴的であり、「グループ」等の他者に関連する語や、「曲」「リズム」「歌詞」「動く」等、自身が体験した内容に関する語が目立った。また、男女に共通な頻出語は「表現」「踊る」「ダンス」「楽しい」「自由」「雰囲気」「恥ずかしい」「教師」「授業」「大切」等の語であり、自身の体験と教師の立場からの語が特徴的であった。つまり、教職必修科目「表現運動」における目的である、学生自身の体験を通して教師としての教材選択や教授技術は、4回の授業においても性差に関係なく習得できたと考えられる。

#### 4. コーディング後の自己組織化マップ

これまで見てきた共起ネットワーク分析のサブグラフとグループの関連語を参考にして、コードを作成した(表3)。これらのコードを元に抽出語の取捨選択を行い、一辺の円

(ノード:node)を20に設定し、自己組織化マップを作成した(図3)。自己組織化マップを用いれば、表3の各コードの関連を2次元のマップから探索できる。その結果、8つのクラスターとそれを構成する26のノードに分類できた。表3の27のカテゴリー中、「考える」カテゴリーのみ削除された。また、8クラスターのうち4クラスターは、1個のノードで構成されているため、そのまま『対面』『自分』『伝える』『創作』と命名した。また、度数が極めて高いノードは「嬉しい」「考える」「指導」「知る」の4個であったため、それらが属するクラスターからみていく。

#### 4.1 『オンラインダンスとの出会い』

「オンライン」「ダンス」「はじめ」「ネガティブ」「嬉しい」「考える」のノードから構成されるクラスターは、大学で初めて「オンライン」「ダンス」を受けることになり、「はじめ」は「ネガティブ」(恥ずかしい・難しい)に捉えていたが、だんだん「嬉しい」(ポジティブ・良い・喜び・驚く)と感じるようになると共に、

表3 表現運動のコード化

カテゴリー	コード	カテゴリー	コード
*対面	実際	*伝える	意見 意見が出る 言う 話す 聞く コミュニケーション
*創作	作る	*自分	自分 自身 自身 自分達 私 自身 私 私達
*体	体育	*音楽	曲 歌詞 合わせる パブリカ うちで踊ろう 使う 振り リズム
*児童	子供	*嬉しい	驚く 喜ぶ 喜び 良い 良かった 肯定・的 ポジティブ
*教師	教員 先生	*個性	個性的 個別性 違う・形 様々 色々 各々 一人一人
*楽しい	楽しむ	*大切	大切なもの・こと  大事 雰囲気 自由 重要 必要
*動く	動き 動かす	*能力	力 技能 技術 創造性 想像力 発想力 忍耐力
*ダンス	踊り 踊る	*はじめ	始め 初め 最初 初めて 前 今回
*表現	表現運動 運動	*人	メンバー  グループ 他者 相手 仲間 人達
*実践	行う 取り組み 活動	*知る	分かる 理解 認識 意識 意識する
*指導	言葉 声 学年 教える	*即興	即興で動く 即興の動き 即興で踊る
*気持ち	心 感情 感情的 思い	*オンライン	動画 見る
*考える	考えた 考え方 考え 思う	*ネガティブ	恥ずかしい 難しい
		*基本の動作	基本動作

\*は、類似したコードに付けたカテゴリー名

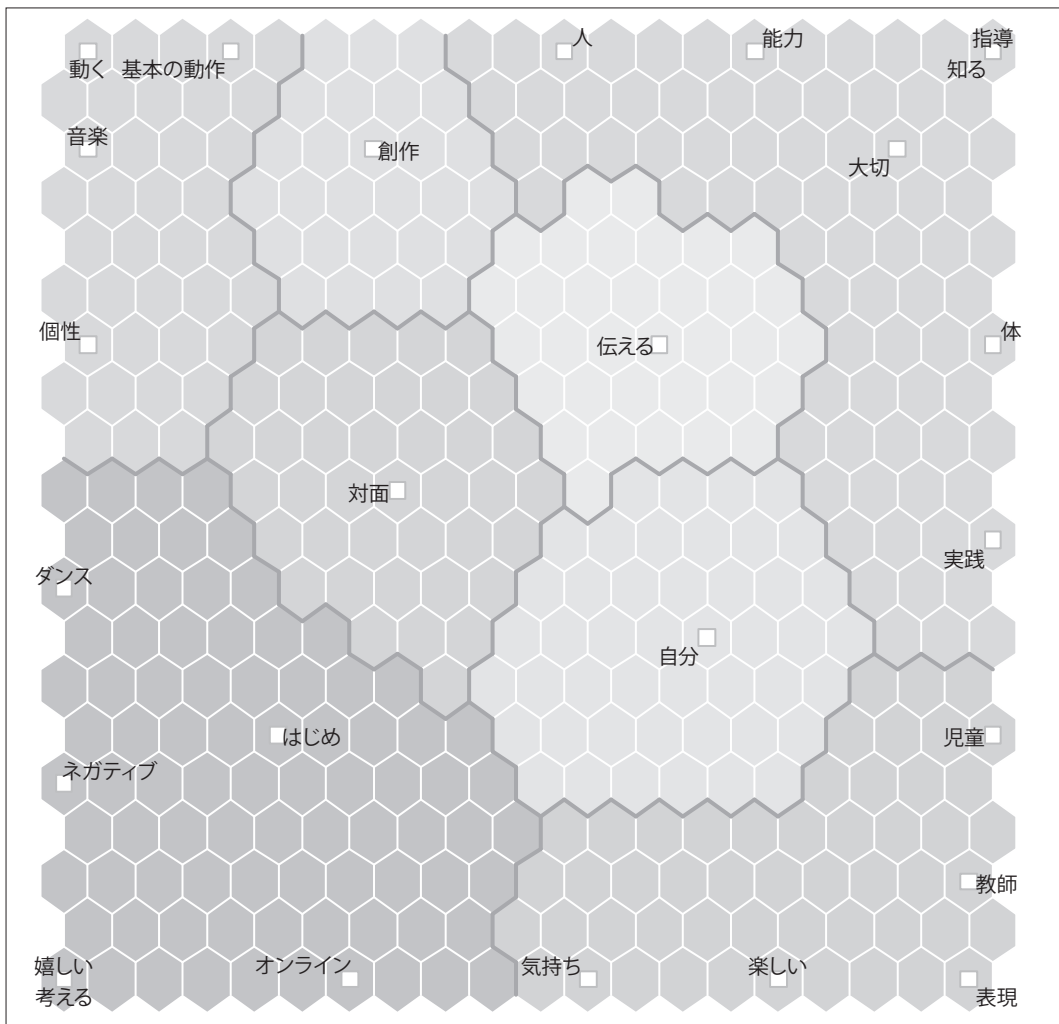


図3 表現運動コーディング後の自己組織化マップ

色々なことを「考える」機会にもなったことから、『オンラインダンスとの出会い』と命名した。隣接するクラスターは『対面』（実際）であり、「オンラインダンス」でも「対面」で「実際」に行ったように捉えていたと考えられる。

#### 4.2 『指導に大切なこと』

「体」「実践」「指導」「知る」「大切」「人」「能力」のノードから構成されるクラスターでは、「体」で取り組む「実践」を「人」と行うことと、「指導」の立場から「言葉」「学年」「能力」などを「知る」ことが「大切」であることから、『指導に大切なこと』と命名した。

#### 4.3 『教師・児童にとっての表現』

「教師」「児童」「表現」「楽しい」「気持ち」のノードから構成されるクラスターでは、「教師」「児童」にとって「表現」（運動）は「楽しい」「気持ち」にさせてくれることから、『教師・児童にとっての表現』と命名した。

#### 4.4 『個性ある動き』

「基本の動作」「動く」「音楽」「個性」のノードから構成されるクラスターでは、「音楽」（曲・リズム）「動き」を手掛かりにして「個性」を發揮することから、『個性ある動き』と命名した。

#### 4.5 『自分』『対面』『伝える』『創作』

1個のノードで構成されている『自分』『対面』『伝える』『創作』の各クラスターは、自己組織化マップの中央に位置し各クラスターと接していることから、各クラスターと関連が強いと言える。特に『自分』『対面』のクラスターは5つのクラスターと隣接しており、今回の表現運動の遠隔授業において、「自分」「対面」で実際に行ったという意識が強いと言える。また、『創作』は「人」「個性ある動き・音楽」「コミュニケーション」「作る」行為であったと言える。『伝える』は「意見を言う・話す・聞く・コミュニケーション」のコードから構成されていることから、双方向の対話が成立したと考えられる。

以上のことから、本授業は、『自分』が『実際（対面）』に『オンラインダンスとの出会い』をし、『個性ある動き』で『創作』し、『教師・児童にとっての表現』『指導に大切なこと』を考え『伝える』ことを学んだと解釈できる。

### 5. スチューデントアシスタントが学んだこと

次に、スチューデントアシスタント（SA）のBさんとCさんが、遠隔授業を通して学んだことを、自由記述から探る。

#### 5.1 Bさんの事例

最初の2クールを担当したBさんには、事前に授業の進行表と内容を渡し、やってもらいたい見本の動きについても打ち合わせをした。授業当日は本研究者が言葉かけをしながらBさんが動き、それを学生60名は画面越しに見た後、課題を体験した。Bさんはブレイクアウトルーム（BR）にも必要に応じて入り、小集団学習をしてもらった。次はBさんの抜粋である。

「私がSAを経験して学んだ事は、受講者に講義の意図やねらい、目的を明確に伝える事の必要性です。ブレイクアウトにおいて、しばしば出された指示通りに動く事に抵抗がある受講者が見受けられました。特に、低学年向けの表現運動（例えば“だるまさんが転んだ”）等、大学生にとってはなぜ教員養成の授業において自分達がこのような事をしなければならぬのか分からない、普通に教え方だけ教えてほしいといった声もありました。彼らに対し、この講義が小学校教員になる上でどのような素養を身につけるものなのか、どのような役に立つのかという事をきちんと説明した上で講義を行うことにより、意味もなく子供じみた事をしなければならぬから恥ずかしい、くだらないという考え方から、今行っている事がこのような役に立つからこのような点に気を付けて積極的に行ってみようという意識改革ができるのではないかと思います。例え全員がそのようになる事は無理だとしても、教員を目指す人々の中で講義に疑問を感じている人がいる場合、その講義の意義を伝える事が大切だと思いました。」

“だるまさんが転んだ”はダンスの基本である「動く・止まる」を、遊び感覚で習得できる教材である。教師役は「ライオンが襲いかかるポーズで止まる！」等、題を考えて児童役を動かすもので、小学校現場では人気の教材である。BさんはzoomのBRで学生の生の

声を聞いたのである。本指導者は、なぜ低学年向けの教材を体験するかも説明し、事前・事後学習において学生は小学生の映像を視聴しているはずである。しかし、学生は疑問を投げかけており、その背景には次のような学生もいたことが推測される。「zoomに入れない」「機器操作がわからない」「容量が少なく映像がダウンする」「指示を聞いていない」「BRに入っても恥ずかしくて課題ができない」「ビデオも音声もoffのまま」「事前・事後学習をしていない」等である。対面式では指導者が学生の様子を感じながら、教材選択や言葉かけを即興的に変えていくことができるが、zoom越しでは瞬時に対応する難しさがああり、zoomでの課題と考えられる。

## 5.2 Cさんの事例

次の2クール担当のCさんには、Bさんの体験情報も入手しzoom授業に臨んでもらった。本指導者もzoomに慣れて、実践して都合がよくない場合はすぐに変更したり新たに挑戦したりする余裕や勇気も出てきた。次はCさんの抜粋である。

「特に“だるまさんが転んだ”の題を考える時には各々が個性的な題を出していて、その柔軟性に驚きました。zoomだからこそ恥じらいがなく、いい意味で中間に頼らずに自分で解決する事が多い為、各々の良さが生かされたと思います。グループワークでは役割が明確なため個人の責任が大きくなり、より踊ることに熱心に取り組めたと感じました。また、先生の“〇〇さんいいね！皆さんの〇〇な所が良かった”等の具体的かつ心のこもった指導に私自身も心を動かされました。授業で1回目より2目をより良く修正し、zoomでできる事を模索する先生の姿から学ぶ事が沢山ありました。当たり前の日常は変わってしまったけれど、授業の最初から最後にかけて、1年生もzoomの出演機会が増え、この授業は他の授業には無いところが沢山あり、とても楽しいと言っていました。私自身SAの立場で授業に参加させて頂き、1年生からも刺激を沢山受けました。zoomに順応しどんな事にも全力で取り組む姿をみて、私も元気を貰っていました。」

Cさんも期せずして教材“だるまさんが転んだ”について述べている。zoomのBRでの学生も異なり、指導者も試行錯誤を経て授業が良くなったのか、同じ教材でもSAの受け取り方が正反対である。このように、「教員—学生—教材」間の関係の中で、授業は生き物のように変化すると言える。

## 6. 遠隔ダンス授業の成果と課題

これまで、学生やSAが何を学んだかを分析してきた。最後に指導者自身が遠隔ダンス授業に取り組んだ成果と課題について、本授業を対象にした論考<sup>11)</sup>も参考に述べる。

### 6.1 指導者のzoom体験

指導者（本研究）のダンス授業はこれまでも「主体的・対話的で深い学び」目指して、学生同士や教員が双方向の対話形式の学びを実践してきた。2020年での遠隔授業でもその可能性を探り、zoomのBR機能を活用して実践が可能になった。つまり、遠隔になったからと言って、授業方法を変えた訳ではなかったのである。特に遠隔授業での留意点は、①事前に授業進行・内容を学生に明確に伝える、②機器操作の不備で授業不参加も許す、③アイスブレイクを使い心身をほぐす、④BRでは学生同士自己紹介をして誰とでも協働する、⑤チャット機能を使い質問や不具合を伝える、⑥教師役は児童役の良いところを褒める等である。例えば⑥の条件を本指導者も守るために、学生が画面上で発表する折には、学生の名前を呼びながら次々に長所を褒めるようにした。「表情がよい、なりきり度100%、動きが大きい、緩急がよい、メリハリがきいている、後ろ向きのポーズでの始まりは抜群、画面から消える最後のシーンが魅力的、仮想背景の駆使はベスト1、発想が豊か」等、20秒間に20人を褒めるペースを保つ。瞬時に褒める観点を見つけ言葉にする。それが3回続くので発表が終わる頃には指導者は息切れしている。褒める観点はそのままダンスの知識や技能と直結しており、実演を観ている学生はその場で学び、自身の実演にすぐ応用している。指導者の言葉かけを学生は覚えていないと思ったが、学んだ内容には次のような記

述があった。

「褒められることによりこれでよいのだと思え自信がついた」「BRでは活発に意見を出し褒めてくれる人がいて勇気をもらった」「表現は何でもありの肯定的世界」「恥ずかしいと思う暇もないほどzoom操作で精一杯」「ビデオonにして動き始めoffにして仲間を見る。いい動きが分かるようになる」「回を重ねる度に上手になった」「教材の忍者の始まりは仮想背景を“城壁”にセットし、手裏剣を放ったら“金屏風”に変える発想には脱帽」「クラスの団結が高まり授業後もリズムダンスを皆で踊った」等<sup>4)</sup>。

## 6.2 本授業を対象とした論考

本授業を研究対象にした論考<sup>4) 11)</sup>によると約9割の学生がポジティブな意見「新鮮・楽しい・対面より遠隔の方が恥ずかしくない・最初は恥ずかしかったけれど最後は楽しかった・多くの人の動きを一遍に見て対比しやすい・他の遠隔授業より有意義」等があった。ネガティブな意見は「対面で行いたい・スペースが狭い・実家だと恥ずかしい・遠隔ならではのトラブルがあった」等であった。また、身体表現に関する学生の自己評価や授業評価を分析した結果では、最頻語「楽しい」が、①表現運動の特性の感得、②コロナ禍における仲間とのつながり、③コロナ禍における運動の基本的欲求充足、④主体的活動、⑤教師行動、⑥授業内容、⑦オンラインツールによる恥ずかしさの低減、⑧個性的な表現に目がいく、に連動していた。また、オンラインの課題として「教員が学生の工夫を積極的にほめていたような他者の動きを見るための教師行動の充実」「雰囲気や表情の分かりづらさへの対応」を挙げている。

以上の言説は、本論文で明らかにしてきたことを実証する内容であった。

## 6.3 遠隔ダンス授業の成果と課題

授業の成果と課題についてまとめてみる<sup>4)</sup>。

一番の成果は、自身の「教材観・授業方法・理論と実践の融合・教育」を再考する機会になり、遠隔を利用した新しい授業への挑戦や50歳も年が離れた学生と一緒に創り上げる授業の醍醐味を味わえたことである。特に事前・

事後学習を義務付けることによって、学生の学びが深まったと考えられる。遠隔授業においても「主体的対話的な学び」を成立させた学生の柔軟性と独創性やダンス領域の遠隔の可能性を実感した。

指導者側では、教材提示やSAとの打合わせも含め事前準備が必須であり、授業当日も試行錯誤しながら臨機応変に対応することや、コロナ禍だからこそ「ひと・もの・こと」とのからだを通したかかわりが重要であることを実感した。また、安全で受容される雰囲気を作り、授業の進め方の段取りを明確化し、ほめることによって学生の挑戦を後押しすることは、どんな授業方法でも重要であり、アフターコロナにおいても遠隔授業の工夫を行い情報発信をする必要がある。その一方で、生身のからだダイナミックに交感する中で生まれる授業の雰囲気を頼りに、直観的・即興的に授業を組み立ててきたやり方は、画面越しでは学生の様子が掴みにくく、他者との「かかわり」を核にして動きやイメージやリズムを共有して表現するダンスの本質がなかなか実践できなかったことは課題である。

## IV. 結論

遠隔ダンス授業を双方向のリアルタイム・対話形式で試み、学生244名が何を学んだかを明らかにする目的で、学生の記述内容を計量テキスト分析した。その結果、本授業で学生はオンラインダンスと出会い、対面を通して個性ある動きで創作し、教師や児童にとっての表現や指導に大切なことを考え、伝えることを学んだことが明らかになった。

具体的には、遠隔授業でも踊ることやグループでの即興表現を楽しみ、双方向のリアルタイム・対話形式の学びは実技であっても可能であり、事前・事後学習や体験・課題を記述することで「分かる(知る)」と「できる」の往還が一層強化されたことにより、教員養成系ダンス授業としての目標達成ができたと考えられる。その為には教材準備は必須であり、指導者の「ほめる」行為が学生の自信に繋がると共に恥ずかしさや難しさを軽減させたが目の前の学生の変化に臨機応変に対応で

きる指導者の実践力が課題である。

### 謝辞

研究対象者には多大な協力をいただき、心より感謝申し上げます。

本研究の一部は2018～2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号18K10957の助成を受けて行われた。なお、本研究は引用文献に掲載した本研究者の論考「オンラインダンス授業の成果と課題:主体的対話的な学びの実現」<sup>4)</sup>、並びに口頭発表「コロナ禍における双方向のリアルタイム・対話形式のダンスの学び」<sup>8)</sup>、「コロナ禍における双方向のリアルタイム・対話形式の学び:実技編」<sup>9)</sup>をもとに大幅な加筆修正をしたものである。

### 【引用・参考文献】

- 1) 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会プロジェクト研究. 「withコロナ時代のダンス授業」調査結果報告.2020
- 2) 文部科学省.小学校学習指導要領（平成29年告示）体育編.2018.東洋館出版社
- 3) 久保田貴之.遠隔授業の学習効果に関する研究の動向.第10回ラーニングメソッド研究会発行.静岡産業大学.2021.7-13
- 4) 高橋和子.オンラインダンス授業の成果と課題:主体的対話的な学びの実現.女子体育. vol.62-10.2020.42-45
- 5) (公社)日本女子体育連盟.特集「コロナ禍の中のダンス」.女子体育.vol.62-10.2020
- 6) 樋口耕一.社会調査のための計算テキスト分析.中西出版.2015
- 7) 樋口耕一.KH Coder3.リファレンス・マニュアル(2019年10月1日取得)
- 8) 高橋和子.コロナ禍における双方向のリアルタイム・対話形式のダンスの学び:横浜国立大学の試行.日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門第40回全国創作舞踊研究発表会 2020
- 9) 高橋和子.コロナ禍における双方向のリアルタイム・対話形式の学び:実技編.第10回ラーニングメソッド研究会発行.静岡産業大学.2021.23-34

10) 高橋和子.ダンスとはからだの境が溶解していく瞬間.体育科教育.大修館書店.vol.68.2020.9

11) 鴨林楓奈.遠隔型表現運動の実践報告:教員養成系学生を対象として.横浜国立大学教育学部卒業論文.2021